

樋口慶千代著

傑作淨瑠璃集

近松時代

大日本雄辯會講談社版

序

明治聖代以後の文學は姑く措き、我が國文學史上、最も精彩ある時代を求むれば、之を前にしては平安朝、之を後にしては所謂江戸時代である。平安朝文學が貴族生活の耽美的情趣を基調としたものであるに對し、江戸文學が民衆の義理人情に本づき、愛慾と物慾との交錯した赤裸々の人間生活を取扱つたのは、誠に意義ある對照である。

然るに時代の古い、題材の國民大衆と縁遠い平安朝文學が、既に幾多の學者によつて、或は訓詁に、或は考證に、或は評釋に、殆ど餘蘊なきまでに研究し盡された觀あるに對し、時代も題材も共に我々に近く、その一線一畫の描寫も現代人の魂を搏つ我が江戸文學が、思ひの外、或る特殊の部分以外は研究されず、又普及されてゐないのは、誠に不可思議な事である。不可思議な事ではあるが、又否み難い事實である。

これは、一面には儒學の影響で、稗史、小説、演藝等は士君子の讀むべきものでないと考へた結果でもあらう。又他面には維新以後、外來文化の攝取に急にして、これ等の研究鑑賞に努むる暇が無かつたにも因るであらう。しかし時代の進展は人を俟たず、近いと思つてゐた江戸文學も、今は既に古典の域に入つて、近松の名文も西鶴の傑作も、原文のままでは鑑賞はおろか、解釋さへも困難な時代となつて了つたのである。それだけに又、近來國文學研究の勃興につれて、江戸文學に對する國民の關心と待望とは、日一日と倍加されつつあることも事實である。

殊に今日は日本精神が旺んに高調され、再び祖國文化の本質を探求せんとする機運に燃ゆるの秋である。我が民衆文學の精粹たる江戸文學に正しき評釋を施し、その神髓を廣く天下に紹介し、以て後昆に傳へる事は、正に現代國文學者に與へられた最大の使命であるといふも過言でないと思ふ。隨つて之が研究に對する我等の期待と囑望とは、實に深くして且大なる

ものがある。卓越した學者の協同的研究、信憑すべき底本の蒐集、複雑多面なる資料の整理、更に加ふるに學究的精緻さと大衆的平明さとの諧調、原典の持つ特殊のかをりや、もちあぢを如實に今人に傳へるための工夫等が必要である。斯くして初めて國民の總てが喜んで愛讀し、容易に鑑賞し得るものとなるであらう。併しそれにはさまざまの困難と苦心とが伴ふ。先人が幾たびか企てようとして企て及ばなかつた理由はそこにあつた。

然しながら、如何に難事なればとて、文學史上のこの一大寶庫を、このまま開かずの扉として遺し去る事は、昭和國民の恥辱であり、邦國文化の痛恨事であると謂はざるを得ない。

この時に當り、我等は突如として快報を得た。畏敬する學友和田萬吉、笹川種郎、樋口慶千代の三君は、數年に亙る苦心計畫の結果、立案漸く成就し、斯界の權威藤井乙男、河竹繁俊、額原退藏、三田村玄龍四君の協力と、講談社長野間清治君の義俠的助力とを得て、この至難なる事業を見事に成し遂げられ、

ここに燦として輝く〔評釋〕江戸文學叢書の刊行を見るに至つた。

斯くて、門外不出の稀覯本の蒐集、各部門一流權威者の動員、大出版社の肝煎、他に得易からざるこの三位一體の陣容の下に、遂に前人未踏の大秀峰が、今や遺憾なく踏破された事は、眞に學界の一大慶事であり、文化史上不朽の業績であると共に、又出版界未曾有の壯舉と謂はねばならぬ。

待望日久しくして、出づべきものが遂に出たのである。私は滿腔の感激と敬意とを以て、全同胞と共に、この成功を喜ぶものである。

昭和八年十二月

上田萬年識

はしがき

江戸幕末までの各種の刊行書中で、著作數に於て最大なものは淨瑠璃本である。其の各派の淨瑠璃中で、最も文學的價値に富めるものは蓋し義太夫淨瑠璃であらう。其の作者の中には、絶世の文豪近松門左衛門を始めとして、幾多の名匠續出し、其の構想はいづれも、義理の精神と人情とを絡ませて描寫した。實に淨瑠璃の要點は、我が道德觀念の表現である。そして其の豊麗な詞章が太夫の美聲で語られ、音樂と操人形あつりにんぎやうの巧妙な所作とが之に伴ふ時、興味は倍加する。

聽衆觀客は、日常の雜務に逐はれて思ひ到らなかつた己が魂の姿を、この樂劇の中に見出し、己が内生活を喚起して共鳴共感する。そして現實生活からは得られぬ歡喜を享け、以て内生活を深大にし、豊富ならしめるのである。斯くして義太夫藝術は、之を鑑賞した我等の先人に大きな影響を與へ、且大衆教育に與つて大きな力のあつた事は、他の何物も及ばぬであらう。思ふに我が國民性は、この側から作られてゐる事が頗る大なのである。私が小學生であつた頃、祖父母や兩親が我等兄弟を折々膝許に集めて、忠義や孝行や情深い者の話をしてくれた。其の度毎に喜んで之を聞き、深く感動し同情したものである。然し其の話が何の本に出でゐるかといふ様な事は、まるで無頓著であつた。其の後、年を

とり、淨瑠璃を聞き芝居を見、又淨瑠璃本をも読んで其の出處を知るに及び、既に亡くなつた祖父母や兩親が話してくれた其の昔を追憶する情も手傳ひ、言ひ知れぬ愛著を淨瑠璃本に感じたのである。ありていに告白すれば吾人は、學校で倫理の講義を聞いたそれよりも、家庭で淨瑠璃にある立派な話を面白く聞いた方が却つて印象が深いのである。

今や外國思想はびこり、其の思想にかぶれて、兎角我が國の文藝を措いて、徒らに外國文藝を讚美する者がある。それ等の者は、我が國民道德や我が藝術の鑑賞を生齧りにして自ら卑下してゐるのであらう。かかる時勢に際會した我々學徒は、大衆に我が國独自の文學を認識して戴くやうにし、そして更に我が文學の向上に志し、覺醒から伸展へ導くやうにする事が最も大切なのである。それには我等の先人たちの最も多くに愛されてゐた義太夫文學の研究も急務の一であらう。希はくは諸君よ、是非とも義太夫文學の傑作を讀んで戴きたい。實際之を讀めば誰にでも面白いのである。又其の研究は、この樂劇に内在する眞實な意義と價値とを知り、我が國民性を正確に自覺する助けになる。之を大にしては我が國民が世界に立つて、人類の幸福を將來する事にもなるのである。

淨瑠璃の要點は、我が道德觀念の表現である事は既に述べた。そして其の所作は人形による幻華劇である。最も欣ぶべきは現實劇の性質をも具備し、人形遣の巧妙な技によつて、俳優のなし得ぬ事をも人形が演ずる事である。

然し古典劇の通弊として、往々描寫の上に深刻さが乏しく、個性描寫とか性格描寫とかの上にも物足らぬ憾がある。又不自然な技巧の加はつてゐる事も認めねばならぬ。

故に吾人は古典劇の短所を補ひ、實質を擱んで進まねばならぬ。思ふに我々の任務は、大和民族が古い傳統によつて培はれた精神力、すぐれた意思の力を本當に作興して國運の隆盛に資し、更に偉大な文藝の出現に向つて精進すべきである。

それには必ず我が國の過去に作られた優秀眞實な文藝と離るべからざるのみならず、時勢の進歩に順應して、其の上に創作された物であらねばならぬ。かるが故に吾人は、社會の方々に對してこの樂劇を敬愛支持して戴き度く、これが研究を慫慂する所以である。寔に現在の我が國民は、あらゆる方面に於て、國民としての周到な反省自覺が要求されてゐる時勢である。是に於て本書が大衆に愛讀されて、文藝の上にも精神文化の上にも、貢獻する所あるべきを希ひ、余が菲才の限りを盡した。

思へば本書は余が、幾歲月構想に、執筆に、校正に、吳竹の節をこめて日夜辛苦した著述である。今之を世に出すは、恰も愛子を千里の旅に手放す心地がして、萬感胸に迫つて來る。そして畏友野間清治君を始め、講談社の諸君は、この著述を是非立派な物にしてやらうとして、到る處微に入り細に互つて教を垂れ給ひ、一方ならぬ厚意を寄せられた。

希くは本書よ。汝能く、講談社諸君の恩や、又先人の研究資料に啓發された恩を感謝し、

我が使命を齎して津々浦々までも周行せよ。且汝の任の重きを忘れず、大きな抱負と深き自信とを以て、滿天下の大衆に見えて愛されよ。

昭和十年三月

樋口慶千代識

淨瑠璃概説

淨瑠璃の起源は足利義政の頃であらう。其の名稱に就いては、「十二段さうし」の主人公淨瑠璃姫藥師如來の申子の名に據つたものであらう。「猿轡」(著者未詳。能樂評判記であ)につて三冊もの。萬治頃刊)に、

「まづ淨瑠璃の義は、文安年中に宇田勾當といふ座頭はべり。盲目たる事を深く悲しみて、因幡堂の藥師如來の誓の深き事を尊みて、數年肝膽を碎き祈りはべりしが、或時三七日通夜しはべりて歎じていふ、予人倫に生まれながら、目瞶膏膏たり。五體不具にしては生ける甲斐なし。あはれ願はくは、予が眼をあけてたび給へ」と、血の涙を流して祈りければ、如來も哀れとや思しけん。三七日の曉、山の端にかかる有明の月鮮かに見え侍り。勾當餘りの嬉しきに、平家の十二の巻に準じ、又は藥師の十二神に評して、やすだ物語といふ事を十二段にして語りき。淨瑠璃國土の藥師たる故、瑠璃光如來と號し奉れば、則ちかたどりて淨瑠璃と名附けたり。根本・平家より出で、しかも節の品多く、其の法ありとなん」とある。

淨瑠璃の事が見えてゐる古い物では、「宗長日記」(柴屋軒宗長撰)享祿四年八月十五夜の條に、

「一兩輩人をつかはし小座頭あるに淨瑠璃をうたはせ興じて一杯におよぶ」とある。

これは駿河國宇津山の記事である。また「守武千句」(天文九年成)に、

「いとどだに座頭まがひの杖つきの(前句) 淨瑠璃語れとし火のもと(附句) ことひはや時は丑若ふけはてて(又附)」

とあるから、其の昔既に片田舎宿々驛々で牛若・淨瑠璃姫の情事を語つてゐたのである。

現存せる淨瑠璃の最も古いものは、普通に「十二段さうし」(作者及び著作年代未詳。或云足利義政時代)であるといはれてゐる。然し其の本文が、其の當時琵琶法師どもが語つた淨瑠璃と同じ物であるか、はた讀本としての物であるかは詳かでない。

「十二段さうし」は其の名の如く十二段本もあれば、他に八段本も十一段本も十五段本も十六段本もある。思ふに語り本もあれ

ば、又讀本もあつたのであらう。

又これ等を語るにも、扇子を搔鳴して拍子を取り、極めて單調なものであつた。「鸚鵡が柚」の序文にも、

「淨瑠璃はじまりて百十餘年、瀧野・澤住兩檢校平家にくはしく琵琶の妙手たりしより淨瑠璃物語といふ草紙を綴り直して、葉師の十二神をかたどり十二段といふ節を語り出せり、其の時は三味線に合はするといふ事もなく、扇を開き左に持ち、右の手の爪先にて骨と地紙とを搔鳴して、色々の拍子を取りたる事なり、其の十二段の目錄さへ、今は知りたる淨瑠璃語りもなし」と見えてゐる。瀧野檢校の事は、「色道大鏡」に、

「抑も淨瑠璃は瀧野勾當節を付けて、文祿三年甲午の年より語りはじめたり、この淨瑠璃に本節とてあり、この本節に表裏とて秘傳あり」

とある。當時の淨瑠璃語りは座頭であつて、人の集る神社や、賑やかな路傍などに、さゝやかな日除けをした中で語つたり、又は酒宴の席などに招かれて語り、或は泊りくの旅舎に呼ばれて語り、旅から旅へ放浪する者もあつた。

永祿年間(これには異説もある)に三味線が渡來してからは、これを弾じて淨瑠璃を語るやうになつた。

三味線は琉球から堺へ渡つた。堺の人で中小路といふ琵琶法師が、それに妙音を出すやうに工夫を凝らしたものであらう。但しこれ等の事に就いては異説もある。「糸竹初心集」に、

「抑も日本に三味線を弾き初めし事は、文祿の頃ほひ石村檢校といふ琵琶法師あり、心たくみにして器用無双者なり、或時琉球の島に渡りけるに、彼の島に小弓といひて糸三筋にて鳴らす物あり、小さき弓に馬の尾を絃にかけて弾くなれば、小弓とはいふとぞ、石村これを探り見るに、琵琶をやつしたるものなり」

とある。又「竹豊故事」に、

「抑も三味線の來由といふは、元來琉球國の弄び物ゆゑ琉球絃と號す、琴・琵琶・和琴等の音を摹したるものなり、日本に之を傳來せし初めは、人皇百七代(百六代の誤)の帝王正親町の院の御宇、永祿五年壬戌の春琉球より泉州堺の津に渡り來り、其の頃の武臣織田信長公下知あつて、之を朝廷に獻じ奏覽に入れ奉る」

「糸竹大全」に、

「琵琶をひく如くに淨瑠璃といふ事をのせて、三味線をひき始めたは澤住がなす所」

とある。それに王朝時代から行はれてゐた傀儡(人形遣をいふ。くぐといふ葛の綱の強いのを人形に附けて舞はせたから出たものに始まり、次第に娯樂化し、)の技が結びつくに至つて、淨瑠璃は忽ち舊來の面目を一新した。慶長頃には既に樂劇と藝術化したものであるといふ。の技が結びつくに至つて、淨瑠璃は忽ち舊來の面目を一新した。慶長頃には既に樂劇としての地盤が成立つたのである。

「淨瑠璃大系圖」に、澤住檢校の門人目貫屋長三郎が、人形を淨瑠璃に合はせて操る事を工夫した由見えてゐる。一説に、淨瑠璃に人形を操る事を始めたのは、淡路の人引田重太夫であるともいふ。

當時淨瑠璃の語り物は、十二段さうしや、御伽草子や、幸若の舞の本や、或は其の焼直しであつた。「古郷歸江戸咄」に、「京田舎遠國端島まではやりける程に、四條川原にて芝居をたて、六字南無右衛門といへる女太夫語りける時、十二段ばかりははや人の聞きふれて珍らしからざるとて、舞にまふ屋島・高館・曾我などを彼節に語りける」

「東海道名所記」に、

「淨瑠璃は京の次郎兵衛とかやいふ者、後には淡路丞と受領せし、西の宮の夷身(人形を舞はす者)を語りひ、四條川原にして鎌田政清が事を語りて人形を操り、其の後牛王の姫・阿彌陀の胸割などいふ事を語りける」

「還魂紙料」に、

「昔の淨瑠璃に梵天國と題するあり、梵天國の册子(御伽草子)によりて作れるものなり、この淨瑠璃は、慶長・元和の頃河内・左内・南無右衛門等が語り出しゝが傳はりて、近く貞享・元祿の頃までも、虎屋永閑・天満八太夫などと、淨瑠璃の祝言には必ず此の梵天國を語りけるとぞ」

江戸の操人形淨瑠璃芝居は、元和二年に杉山七郎左衛門(後に丹後)が京から江戸に下つて興行したに始まる。「色道大鏡」に、

「杉山七郎左衛門といふ者世に出て瀧野直傳の本節を語り、最も淨瑠璃に於て中興の開基たり。杉山江戸に來り、元和二年丙辰

の年より芝居をたて、操りをして淨瑠璃を語る、其の後杉山氏承應三年の夏江戸より京都に上り、悉くも口宣を頂戴して天下第一杉山丹後掾藤原の清澄と名乗る」

「奈良紫」に、

「杉山七郎左衛門といふ町人、瀧野の妙曲に歡喜し深く望んで師弟となり、伎藝を覺え得て東都の一風とす、又小平太といふ者瀧野の弟子にて、京都よりして慕ひ來りて、七郎左衛門の助音を語る」

とある。小平太は後に薩摩太夫といひ、入道して薩摩淨雲といつた人であらう。

寛永の初めには、澤住の弟子薩摩淨雲が京から江戸に下つて、芝居興行に成功した。そして其の門下から數多の秀才が出た。抑も淨瑠璃發祥の地は上方であるが、其の勃興は江戸の方が先であつた。其の曲風も、古説經節に準據した上方の柔軟なものから、江戸氣質の勇健なものに轉じた。

淨雲は從來の短い端淨瑠璃(十二段さうし)は長篇であるが、實際を捨てて、續き物の段淨瑠璃(全篇を六段に分けたものである)を創めた。其の高弟櫻井和泉太夫(後に丹波)は、金平淨瑠璃を語り創めた。

金平淨瑠璃とは、坂田金平又は之と類形の武勇談を主題とした淨瑠璃をいふ。これ等は主として六段物である。

京都では淨瑠璃の發達運々として振はなかつたが、寛文年間に淨雲の高弟虎屋源太夫が上京してから隆盛に向つた。其の門から山本土佐掾(角太夫)・井上播磨掾が出で、播磨掾の門から清水理兵衛が出た。理兵衛の門から希代の名匠竹本義太夫が出でて、絶世の文豪近松門左衛門と提携するに至つて、浪華淨瑠璃の發達は巖然群を抜いて古今に獨歩し、世界に誇るべき我が幻華藝術を大成した。

淨瑠璃は數多の流派に分れたのであるが、就中現今も流行してゐるものは義太夫節・常磐津節・清元節である。これ等の淨瑠璃中で最も文藝的價值に富むものは、蓋し義太夫淨瑠璃であらう。近松の後の作者も近松の影響を受けて名篇傑作を出し、延享・寛延頃に於ては義太夫淨瑠璃の黄金時代を現出した。

X X X X

淨瑠璃本刊行の先驅をなせる繪入淨瑠璃本(丹縁本及び俗に虱本と稱する繪入の細字本、それに金平本と稱する繪入の淨瑠璃本を併せていふ)は寛永に始まり、寛文頃になつて最も盛んとなり、享保年間に至つて絶えた。其の間約百年に亙つて刊行された物は千種に上るのであらう。

繪入淨瑠璃本の最も古いものは、「たかたち」(行數二十三乃至二十九行の横本、寛永二年京都寺町妙滿寺之前勝兵衛開板。この本は稀書複製會の摸刻本の中にある)であらう。

又淨瑠璃を生んだ説經節の本、「せつきやうかるかや」(行數十一乃至十三行の中形本、寛永八年京都淨瑠璃屋喜右衛門版、丹縁本。この本も稀書複製會の摸刻本の中にある)も刊行された。

江戸で金平本の開版は萬治初年頃に始まり、後に戦記物などに轉じて正徳後に及んでゐる。上方で金平本の開版は江戸よりも古く、そして貞享に及んでゐる。

又大字稽古本の刊行は延寶から幕末に及び、義太夫本だけでも其の種類千四百に達するであらう。

大字稽古本の最も古いものは延寶七年刊の八行本、「牛若干人切」(宇治加賀掾正本、延寶己未仲夏、京都二條通寺町西へ入丁山本九兵衛版)であらう。後には種々な行數の本も刊行されたが、就中七行本は後世最も多く淨瑠璃稽古本の形式となつた。「外題年鑑」に「吉野都女楠の時よりも大字七行となし始め云々」とある。「吉野都女楠」は近松門左衛門作で、正徳元年九月十日から初めて竹本座に上演されたものである。

大字稽古本は、其の形式をもとと光悦の謡曲本に倣つたものであるので、其の書風も光悦風(即ち近衛流)から變形したものである。

淨瑠璃本の刊行は甚だ盛んであつた。そして淨瑠璃そのものは、歌謡及び戯曲の大きな源をもなし、以て我が通俗文藝の上に多大な貢獻を齎したものである。

冒頭にも一言した如く、徳川時代に刊行された各種の書籍中で、淨瑠璃本は其の著作數の多い事に於て、實に最高位

に立てるものである。以ていかに民衆に愛讀されてゐたかが窺はれる。

淨瑠璃は既に述べた如く、其の文の妙味を讀む事と、人形の所作を見る事と、三味線の響や大夫の音節を聞く事と、この三方面から成立つてゐる樂劇である。故に淨瑠璃本を讀むだけでは、淨曲の詞章に對する完全な鑑賞法とはいへない。これを道行の文に見るも、縁語や掛詞や頭韻法や脚韻法や、また對句法などのあらゆる修辭上の方法を巧みに用ひ、古歌・故事などを引用し、概して七五調の美文を以て、旅行の趣を描き出してゐる。其の爲に文章冗長となり、事件の展開が緩慢となる嫌がある。蓋し道行の文は、劇の中心が或場所から他の場所へ移動する間であつて、道中の趣や風景に興味を感じさせるのが主である。其の感興を喚起させようとして、美辭麗句を連ねる事によつて往々難澁曖昧なものと成り、或は道中の土地が前後し、或は横道に入つたりして、讀者に倦怠の心を催させる事もある。然し其の詞章が大夫に語られて三味線の節奏に乗り、人形の俯しつ仰ぎつ行きつ戻りつ振向きつ立止まりつ、其の所作が美しい背景の中に融合調和する。そこに冗長とか緩慢とか、其の他理路を辿る違なくして直に感情に訴へる爲、妙文となつて耳に響き、妙な調と舞臺効果の美しさに、觀客をして恍惚たらしめるのである。

又男女相愛の甘い場面や情死などの悲惨な場面も、これ等を美しい人形の所作に於て見る時は、何の嫌味なくして其の愛憐或は哀痛の情胸に迫り、言々句々人の心を打つであらう。

要するに、淨瑠璃の詞章を十分に鑑賞する爲には、其の音節曲譜や舞臺裝置や、人形遣の事までも、悉く知らねばならぬは勿論である。が此等は近松前後の古い時代に於ける、精確な事は到底知れぬし、又昔と今とは大いに變遷してゐる。人形の遣方に就いていふも、上方と江戸とは既に違つてゐる。地方地方でも異つてゐる。これ等は、それぞれ専門家や藝人の範圍にも屬する事であつて、本書はそれ等の研究までは、行届かぬ事を斷つて置く。

凡例及び底本

- 一、本書は希世の文豪近松の作品を中心として、其の時代に於ける優秀な曲の中から、余が觀る所に從つて拔萃したものである（本書では之を）。そして後の隆盛時代篇（之を下卷）に續けた。
- 一、それ等の名曲に就いて、解題・作者傳・實説（又は出處）・影響・登場人物・梗概・評註・追考などの項目に分けて、所要の事項を詳説した。中でも最も力を注いだのは註釋である。勿論一篇の趣意を把握するのにも大切な事であるが、其の基礎をなす語句を正しく深く理解する事は、更に大切な事であると信ずるからである。
- 一、地名には變遷があつて、殊に支那の地名などは、之を現今の地名に當てては、却つて分りにくい場合もある。よつて必ずしも現今の地名に限らず、最も分り易いと思ふ地名に從つた。
- 一、院本の用字例は甚だ蕪雜である。即ち當字・誤字や、假名遣などの語法の誤がざらにある。送り假名も不足がちである。ここに於て誤字、及び誤解を招き易い當字を訂した。そして誤讀の慮がない限り假名を漢字に當て、振假名を施したりしたのものもある。また會話の文には「」を附加へた。そして註釋を極めて多くした。斯くしたのは丁寧親切を旨として、大衆に愛讀して戴く事を希ふからである。
- 一、假名遣・語法は總て底本を尊重して改めない。假名を漢字に書替へても、底本の假名を其の儘振假名にして殘して置いた。これは其の昔の讀癖を粗略にせぬ爲であり、且はさかしら事といはれるを氣遣つたからである。故に本書は大體底本の姿を其の儘に存せるものである。
- 一、句切も底本に從つた。これは語り物として間隔を示し、其の間に人形の所作の入る場合もある。然るに讀物として

句切を改めては、淨曲としての價値を毀損するからである。

一、地・フシ・三重、其の他種々の音曲上の語なども、總て底本の通りにしようとして苦心したものである。故に一見錯雜に見えても、それは決して疎略にしたものではない事を知つて戴きたい。本書は總て印刷の許す限り、底本を嚴守したものである事を重ねて申して置く。

二、本文中に※を附けた語句は之を拔出し、○を附して頭註を施した。◎を附けたものは、之を卷末に五十音順に排列し、更に詳解を加へて追考とした。◇を附けたのは、其の下の本文に對する評である。

一、頭註に拔出し、又は追考とした語句は、本叢書全般の索引中に五十音順に編入した。この別巻索引は江戸時代語の辭書たらしめようとしたのである。

底本は次の書に據り、他の古院本をも參考した。

曾根崎心中付り觀音廻り 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 八行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

傾城反魂香 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

丹波與作待夜のこむろぶし 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 八行本

卷末に「正本屋山本九兵衛版 大坂高麗橋堂丁目山本九右衛門版」とある。

五十年忌歌念佛 近松門左衛門撰 正本 八行本 山本九兵衛版

奥に「右此本は太夫ぢぎの正本をもつて板行致し候されば初心稽古のためことごとくかながきにしてふししやうくぎり三味線ののりかたほどひやうし三重おくりのしなぐひみつを残さずあらはし令板行者也 山本九兵衛

板」とある。

忠兵衛 冥途の飛脚 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 八乃至九行本

卷末に「大坂御堂筋正本屋仁兵衛印」とある。

國性爺合戦 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

美濃紙判稽古本であつて、奥に竹本筑後掾の跋文がある。

鐘の權三重帷子 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

曾我會稽山 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 正本屋山本九兵衛・山本九右衛門版

博多小女郎波枕 近松門左衛門撰 竹田出雲掾清定正本 七行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

奥に「予以著述之原本校合一過可爲正本者也 竹田出雲掾清定」とある。

紙屋治兵衛 心中天の網嶋 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

女殺油地獄 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 山本九兵衛・山本九右衛門版

心中宵庚申 近松門左衛門撰 竹本筑後掾正本 七行本 山本九兵衛版

曆 井原西鶴撰 宇治加賀掾直傳 八行本 山本九兵衛版

卷末に「貞享二乙丑歲正月吉日」とある。そして加賀掾の跋文及び版元が刻してある。

傾城八花がた付り好色八徳一損 錦文流撰 太夫直之正本 十行本 奥附缺

八百屋お七 紀海音撰 豊竹越前少掾正本 八乃至九行本 正本屋喜右衛門版

心中二つ腹帯 紀海音撰 豊竹上野少掾正本 七行本 西澤九左衛門版

奥附に「音節は此道の父清濁は文句の母なれば正本まことに珍重すべきもの也 豊竹上野少掾印」 作者紀海音

大坂上久寶寺町三丁目正本屋西澤九左衛門版(印)。

傑作淨瑠璃集上

目次

淨瑠璃概説

凡例及び底本

會根崎心中……………一

傾城反魂香……………四

丹波與作待夜のこむろぶし……………二七

清十郎 五十年忌歌念佛……………三五

忠兵衛 梅川 冥途の飛脚……………一九

國性爺合戦……………二四

鐘の権三重帷子……………二五

曾そ我が會くわい稽けい山ざん.....三三

博はく多た小こ女にょ郎らう波なみ枕まくら.....三九

紙屋治兵衛
きいの國や小はる心しん中ちゆう天てんの網あみ嶋じま.....四一

女にょ殺ころし油あぶら地ぢ獄ごく.....四二

心しん中ちゆう宵よひ庚かう申しん.....五九

曆こま.....六三

傾けい城せい八やう花はながた.....六四

八や百ひゃく屋やお七しち.....七三

心しん中ちゆう二ふたつ腹はら帯おび.....七七

追考.....八三

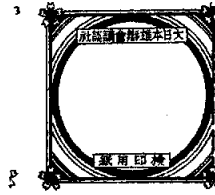
題簽 安田 鞞彦
裝幀 小村 雪俗

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義ノミト興叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

發行者 野間清治

印刷者 井上源之丞

印刷所 東京市本所區既橋一丁目二十七番地ノ二
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 五六二〇〇番
代表 五六二〇〇番
牛込(34) 五六二〇〇番

(本製地海天)